

平和宣言

81年という年月の長さには、思いを馳^はせます。

あの日、

今と変わらず照りつける太陽の下^{した}で、

一筋の光も届かない壕の、真の暗闇の中で、

いつ止むか分からぬ砲弾の中で、

あるいは、逃げ込んだ先で罹患したマラリアの苦しみの中で、

生きることを渴望し、かなわなかった、20万を超える命。

沖縄には今も、その東西の果て、南北のすみずみに至るまで、悲劇の記憶が残されています。

今や、沖縄県民の9割以上が沖縄戦を直接に体験しない世代となりました。それでも、わたしたち沖縄県民が、地獄と言われた日々を我がことのように感じ、再びこのようなことを起こさせまいと決意を新たにできるのは、絶えることなく鎮魂と慰霊の営みを続けてきた方々、「後世のために」と子や孫へ、あるいは学校や地域で凄惨な体験を語りついだ方々、さらに、惨劇の舞台となった場所を保存し続けてきた方々の長年の努力の成果にほかなりません。

全てを失ったと言っても過言ではない81年前のあのときから、今日^{こんにち}のような美しい島々を取り戻すまでに、先人たちの懸命の努力があったことを、わたしたちは忘れてはなりません。しかしながら、沖縄には今なお広大な米軍基地が存在し、過重な基地負担と基地から派生する諸問題により人間の安全保障が脅かされる現状が続いています。特に、合意から30年が経過しても返還がなされない状況にある普天間飛行場については、一方的な押し付けではない、日米両政府と県の対話による解決を求めています。沖縄県は、一日も

早い普天間飛行場の返還をはじめ、過重な基地負担の軽減を訴え続けます。

「沖縄戦の実相にふれるたびに 戦争というものは これほど残忍で
これほど汚辱にまみれたものはないと思うのです」

沖縄県平和祈念資料館には、この言葉で始まる「むすびのことば」が掲げられています。しかし、特に近年、大国の力による一方的な現状変更の試みによって国際秩序が揺らいでいる状況は、平和を希求する沖縄県民の、そして世界中の人々の願いから最もかけ離れたものだと言わざるを得ません。

戦争は、たとえ遠い国のことであっても決して対岸の火事ではありません。世界中が経済のつながりなどをいっそう緊密にしている現在、他国の軍事衝突が直接・間接に生活に深刻な影響を及ぼすことを、今、わたしたちは身をもって否応なしに経験しています。

折しも今年には核拡散防止条約の再検討会議が開催されるも、成果文書の採択には至りませんでした。核拡散への懸念が高まる状況であるからこそ、わたしたちはいっそう、平和と核廃絶を訴えてゆかねばなりません。戦争という手段を否定し、あらゆる戦争に反対し、戦争によらない課題解決を追求することにより、日本国憲法にも国民の念願とうたわれている恒久の平和と、その過程としての核廃絶を目指すことは、空虚な理想論などではなく、取り組むべき責務として求められているのです。

この摩文仁の地には、沖縄戦で命を落とした方々のお名前を、敵味方・国籍などの分け隔て無く記すことを理念とした平和の^{いしじ}礎があります。また、アジア太平洋地域の平和の構築・維持に貢献した方々を顕彰する沖縄平和賞は、今年、第13回の贈賞を行うほか、県内で平和につながる身近な社会貢献活動に取り組む方々を「ちゅうちな一草の根平和貢献賞」として表彰しています。このように、あの筆舌に尽くしがたい経験を受け継ぎ、平和のこころを広く国内外に発信しようとする沖縄だからこそ、世界平和の実現のため

に貢献していく必要があります。

沖縄県では、沖縄戦の実相・教訓とこれまでの研究の蓄積をもとに、恒久平和と人間の安全保障の確立を実現させるため、戦後100年に向けてわたしたちが進むべき方向を示したビジョンを策定します。

わたしたちは、かつてこの地で繰り広げられた出来事を次の若い世代へ責任を持って正しく伝え、平和について学び考える歩みを続けながら、世界平和の懸け橋としての役目を担い、平和創造の拠点、国際協力・貢献のための拠点として世界の中で確固たる地位を築いてまいります。

あっさ ちゆぬちゃー あた ぬちだから ぼー うちなー うふいくさ いちじぐく
数多ぬ人々ぬ 惜ら命宝 奪たる 沖縄の大戦ぬ 生き地獄や
なま んにふか きじゃ く わったー いくさ いちあわり
今ん 胸深さんかい 刻み込まっとーやびーん。我々や 戦争ぬ生き哀れん
わきわきー にどう あ ふりぐとう
でいし 共有っし、二度とう 彼ぬよーな 愚行や
く けー
繰い返ちえーないびらん。
かーま くに いくさ わったーく
遠方ぬ国をうていぬ 戦争やらわん 我々暮らしにん
じゃーふえー うゆ みーぬめー
悪影響ぐとう 及ばすんでいる 現実ぬくとうんかい、
まーんまーん くに いくさ いくさやならん うふぐいー
何処其処ぬ国ぬ 戦争やていん「戦争反対」んでいち 大声っし
あ ゆがふーゆー すび
叫びらんとーないびらん。世果報世 実現なすんでいるくとうや
ただ うむいかんげー しかき すくぶん
単ぬ理想 やあらん。取組らんとーならん 責任んでいし
かたみ
背負らさっとーやびーん。
わ うちなー いくさ あわ う ち うちなー ゆがふーゆー
我した沖縄や、戦争ぬ哀り 受き継じょーる くぬ沖縄ぬどう世果報世ん
うさぎむん うむい
かいぬ 貢献やないるんでいぬ 確信かきてい、
しけー ちゆぬちゃー まじゆん むちめーしーなす
世界ぬ人々とう 共々なてい、うぬ役割果たすんでいし、
くま やくすく
此処をうてい 宣誓さびーん。

The tragic Battle of Okinawa, which claimed countless lives, remains deeply etched. We remember the misery of war, and we vow to never repeat the folly.

Given the reality that even wars far from home impact our daily lives, to oppose all wars and realize peace is no ideal but responsibility.

Having borne the scars of war, it is Okinawa that can contribute to peace, as we hereby pledge to fulfill this role together with the rest of the world.

本日、慰霊の日に当たり、犠牲になられた全ての御霊^{みたま}に心から哀悼の意を表するとともに、世界の恒久平和・核廃絶に沖縄が貢献する未来を目指して、不戦を誓い、反戦を訴え、非戦の道を探求することを決意し、ここに宣言します。

令和8年（2026年）6月23日

沖縄県知事 玉城 デニー

〈しまくとぅば・英語翻訳 エッセンス〉

あまたの人々の命を奪った沖縄戦の悲劇は今も深く刻まれている。我々は戦争の悲惨さを共有し、二度と愚かな行為を繰り返してはならない。

遠い国の戦争でさえも暮らしに影響する現実に対し、あらゆる戦争に反対すること、平和を実現することは単なる理想ではなく、取り組むべき責任が求められている。

沖縄県は、戦争体験を受け継ぐ沖縄こそが平和に貢献できると信じ、世界の人々とともにその役割を果たすことをここに誓う。